

R18 です、読む時にご注意ください

## ヴァージルの誕生日 (R版)

ヴァージルの誕生日の予定が決まった翌日、仕事の合間の休憩時間にアンジユが調べたのは、いわゆる、勝負下着のカテゴリだ。

プライベートのタブレットではあるが、執務室でこれを見るのはなかなか勇気がいる。他に誰も見ていないとしてもだ。

だが、仕事のあとはヴァージルと合流するので、ここしか使える時間がないのだ。

色は当然オレンジにして、あとはどんなものにするかが悩ましい。

探してみると、鉄板のベビードールだけでなく、様々なものが出てきた。

初回からあまり攻めたものにする度胸はないので、ほどほどのものを探していく。

謎の技術で即配達されるが、とどいたことをバレても駄目だ。

さんざん悩んで、結果的に選んだものは、オープランジェリーと呼ばれるもの。

本来隠すべき部分が全開になっているのが基本だが、割れてはいるがぱっと見では露出しすぎないものにした。

とはいえレースで透けているから見えるし、少し指を入れれば簡単に全開になる。

しかしデザインは思ったよりかわいし、なにより画面越しだが綺麗なオレンジがあったのだ。

購入をタップするのも一苦労だったが、無事に注文でき、ふうと一息ついた。

そして誕生日前日の夜。

おうちデイナーは明日の夜ということ、仕事のあとだからとささやかな乾杯だけにした。

とはいえ、とどいて隠してある下着を身につけるつもりで、つまり「そういう」ことの予定だ。

「できれば……一緒に入りたいです」  
お風呂どうぞと声をかける前に、おねだりが飛んできた。

恥ずかしくてあまり一緒に入浴することはないので、誕生日の我儘で言いだした気持ちにはわかる。

しかし、そうすると下着がバレてしまい、お風呂どころではなくなりそう。

考えこんだのは数秒で、わかりましたと答えるまでの照れだと勘違いされたらしい。

お湯を入れてきますと軽やかに去って行くヴァージルを眺めてから、クローゼットからパジャマをひっぱり出す。

最悪、寝る前に席を外して着替えてもいいが、バレずに着替える方法はいくつもある。

もこもこ素材の愛らしいパジャマの下に潜らせれば、学生時代に身につけた「上を着たまま下着

を着てみせる」テクニクで切り抜けられる。

ショーツは見られてしまふかもしれないが、下だけならまだ破壊力はさほどではない。

羞恥心が勝ったので、紐ではあるが透けは少ないから、ぎりぎり普段使いにも見える、と思う。

よし、と満足して、ついでにヴァージルの——  
勿論おそろいだ——を手にした。

「ヴァージル、パジャマ持ってきましたよ」  
声をかけると、入浴剤を入れていたらしく、中から出てきた。

透明度の少ないものを選んでくれるあたりが優しいなと感じる。

誕生日だからと押し通せるのに、アンジュの恥ずかしさを汲んでくれるのだから。

入浴中になにかする気はなかったようで、ごくごく健全にお風呂を楽しんだ。

ちよつといちやつくくらいはご愛敬だろう、のぼせない程度だったのだし。

「あなたの髪を乾かしたいので、ソファに行つて  
いますね」

にこにこ笑顔のヴァージルに懇願されて、着替え問題はあっさり解決してしまった。

誕生日なら自分が彼の髪を乾かす役な気がするが、ばれずにすむなら問題ない。

それに、アンジュだって甘やかされるのは好きなのだ。

にしても、いつものパジャマの下にセクシーな下着を着込むというのは、なんというかとても……とてもやらしい気がする。

考えこんだら負けだと思いきることにして、心配される前に部屋へもどると、準備万端のヴァージルがいた。

丁寧な髪を梳きながら乾かしてくれるので、自分でやるより綺麗に仕上がる。

満足げなヴァージルを見ていると、それでもいいかとなるもので。

明日の準備などを先にしたので、時刻はそろそろ日付が変わるころだ。

彼の生まれた時間は正確には違うらしいけれど、0時ちょうどにおめでとうが言いたかった。

快く了承してくれたので、この時間まで健全に起きていたわけだ。

……でないと、間違いなく時間など気にしていられたかったから。

セットしておいたアラームがちようどを告げたところで、アンジュのほうからふれるだけのキスをする。

「お誕生日おめでとうございます、ヴァージル」  
感謝と精一杯の愛情をこめたつもりだったが、彼からの反応はない。

もつと大胆なほうがよかったかと思っていると、ぎゅうつと抱きしめられた。

「……すみません、あまりにも嬉しくて」

どうやらフリーズしていたらしい。

感極まるほどだろうかと思っけけれど、喜んでもらえるのは嬉しいものだ。

すでに満足げな様子だが、これで終わりにされるのは困る。

プレゼントは起きてから渡すことにして、折角のサプライズだ、せいぜい驚いてもらいたい。

「それでですね、とってもベタなプレゼントなんですけど……」

「はい？」

なんのことでと怪訝そうな顔のヴァージルの前で、ゆっくりパジャマの前を外していく。

上から三つ目のボタンあたりで、おおむね想像がついたのか、彼の腕に動きを阻まれた。

はしたないと怒られそうなほど真剣な顔だが、耳はうっすら赤く色づいているので、どうやら違うらしい。

ふーっと長めの息を吐いて気を落ちつけたらしいヴァージルは、ひよいとアンジュを抱きあげた。

そのままいつもより歩幅も広く歩いていき、あつというまに寝室へ到着する。

壊れものを扱うようにベッドへ降ろされると、まっすぐ見つめてくる紫の瞳に射貫かれる。

「これは、プレゼントは自分、というやつですか？」  
「やっぱり知っていたらしい。それとも彼の故郷

にもあるのだろうか。

詮索はせずに、そうですね、とだけうなずいた。

「なら、ラッピングを剥がすところから、ぜひさせてください」

だから止めさせて、ここまで連れてきたわけだ。納得したもの、いざ、ごく普通のパジャマの下

のセクシーな下着を暴かれるとなると、途端に恥ずかしくなる。

自分でやるならまだ覚悟ができたのだが、ガン見されていると身の置き場がない。

たまらず手で顔を覆ったが、甘い声で隠さないでと懇願されれば、数秒で陥落してしまう。

「ああ……素敵ですね、とてもお似合いです、俺の色を身に纏ったあなたは、とても綺麗だ」

ゆっくりとボタンを外したヴァージルは、現れた扇情的な下着をためつすがめつ眺めて、ほう、と息をついた。

喜んでもらえてなによりだが、羞恥心のゲージはふりきれそうだ。

男性にしては綺麗な、けれどしつかりした指が中心部にふれば、あっさり隠すべき場所がさらされる。

「——キスをさせてください」

とろけるような声で名を呼ばれて、おそろおそろ顔をあげれば、すぐ唇が重なった。

窺うように舌でつつかれて、薄く開けば口内に

もぐりこんでくる。

はじめから遠慮なく深いキスに翻弄され、ただでさえ回っていない頭はわけがわからなくなる。

その間に器用なヴァージルの手は動いていて、アンジュからしたら手品のように、どンドンパジャマが脱がされていく。

軽く腰をひっかいて軽い快感を与えたあと、当然のように下も全裸にさせられてしまった。

「……下着はそのまま考えましたが」

一度キスを止めて、自分の服はぞんざいに脱ぎ捨てる。

けれどこちらの下着とパジャマは、丁寧に傍らに置いてくれた。

ぎゅっと抱きしめられると、素肌のふれる感触が心地いい。

「折角の衣装を、汚したり……最悪、破くのは惜しいので」

「……べつに、かまわないのに」

着たまま行為ができる下着を選んだのだ。

そこまで高級品ではなかったから、新しく買ったっていい。

普段は無駄遣いをよしとしないけれど、これもプレゼントの一環ならアリだろう。

だがヴァージルはあちこちに口づけを落としながら、きっぱりと首をふった。

「俺のために選んでくれたものなんですから、無

碍になんてできません」

あんまりにも当然の口調だから、二の句が継げなくなる。

だから代わりに首に腕を回してぎゅっと抱きつくことにした。

本当に彼は、そういうところが大好きで、愛おしくて、困らないけどこまる。

力一杯抱きついてても、ちっとも重心はブレないし、むしろ嬉しそうに抱きしめ返してくれる。

キスをねだれば喜んでと返してくれて、お互いあちこちにキスをしあつた。

じゃれあうようなものは徐々に再びしつとりしたもののへと変化して、舌を絡めるキスの時間が長くなる。

合間に弱い部分を指先でなぞられれば、それだけで身体が震え、閉じた足の間が潤んできているのがわかった。

「――本当はきちんと、時間をかけるべきなんです……」

何度目かのキスのあと、吐息に乗せてかすれた声が耳にとどく。

熱のこもった目で見つめられて、押しつけられた腰も同じくらい熱い。

「あなたのなかに、はいりたい」

切なげに囁かれて、嫌だと言えるわけがない。

はしたなく濡れていることを知られるのは恥ず

かしいが、お互い様だとそろりと足を開き、ヴァー  
ージルの腰に絡めた。

積極的な態度に、びくりと彼の身体も跳ねる。  
けれどすぐにひたりと熱が当てられて——ゆっ  
くりと、侵入を開始していく。

慣らしていないのでいくらかひつかかりはある  
が、痛みを伴うほどではない。

なにより、そのあとに待っている快感を知って  
いるから、身体はもつとと言うように奥へ誘う。  
結果、さして苦勞もなく奥までヴァージルのも  
のを受け入れることができた。

「……つらく、ないですか？」

眉を寄せて快感に耐えながらも、動かずにアン  
ジュの身を気遣ってくれる。

汗が首筋を伝う様子すらセクシーで、答えの代  
わりに中がきゆうと締まった。

びくびくと跳ねているところからして、彼のほ  
うもかなり我慢しているのだろう。

「平気です、だから……ううい、ください」

普段は照れが勝ってなかなか言えないが、今  
日くらいはと勇氣を出す。

あれほど攻めた下着を着たあとなら、ハードル  
も下がるといふものだ。

ヴァージルは嬉しそうに笑ってから、がつんと  
奥を打ちつけた。

あまりの衝撃に一瞬で絶頂に持っていかれ、掠

れた悲鳴を上げて首をそらす。

そこへじゆうっと吸いつかれるものだから、上  
も下も気持ちよくて、喘ぎ声は止められない。

けれど甘く啼くほど内部に埋めこまれた楔は熱  
さを増していく。

「アンジュ、アンジュ……っは、好きです、愛し  
てます……っ」

しかも合間には恋人が切なげに名前と愛を囁い  
てくれる。

なにもかもすべてがヴァージルに包まれて、窒  
息しそうで、それもいいかとさえ思ってしまう。

震えてうまく動かない腕で必死にすがりついて、  
離すまいと腰をくつつけて足を絡めて。

息づかいがいよいよ荒くなり、限界が近いとぼ  
やけた頭が知らせてくる。

だからキスの合間に、おねがい、と声を出した。  
「なかに、ちようだいっ……」

妊娠しないとわかっていても、万一を考えるヴ  
ァージルはいつもきちんとしている。

けれど今夜はなし崩しで、いつもならする前準  
備もしていない。

でも誕生日なのだ、身体の中も外も、全部染め  
てほしいとねだったっていいだろう。

理性を手放したアンジュの甘えに、ヴァージル  
も宥めることなく、むしろ許しを得たといわんば  
かりに限界まで足を開かされて、奥の奥まで貫か

れる。

遠慮のない攻めかたはいつもと違って荒いほどで、けれどそれがたまらなく嬉しい。

彼の激情を受けとめるのは、己だけだという優越感と、突き抜けるような快感に、もつともつと求めるだけだ。

「っ、あ、ぐ……っ！」

「あ、あ——っ」

やがて、押し殺したうめき声とともに、ぬるい感触が広がっていく。

中に注がれたのだと本能的に察して、快感と共に内側から歓喜も満ちる。

身体を離れたヴァージルは、どさりと横に倒れこんだ。

体重をかけないようにするあたりは流石の氣遣いだらう。

少しでも距離があるのがさみしくてすり寄ると、汚れますよと困った顔をするが、止めることはなかった。

「あとでまた、お風呂呂に入ればいいでしょう？」  
体温が混じりあったような感触と、いつもより

ぼんやりしたヴァージルが見られて、この時間も好きなのだ。

甘えるように頬を寄せると、観念してすっかり抱きしめてくれる。

「身体は平気ですか？ いつもより無茶をさせま

したから……」

たしかにガツガツ攻められたし、足も無理矢理開かされたから、少し痛い。

だが、翌日腰が痛いくらい、なんてことはない。一日中二人ですごすのだから、気にしなくていいだろう。

「大丈夫ですよ、気持ちよかったし、嬉しかったです」

首を伸ばしてキスをする、途端に赤面するのが愛らしい。

すぐにお返しをやってきて、けれどヴァージルからのそれはもつと深く、呼吸ごと奪うようなものだ。

引きはじめていた熱がぶり返ってきて、口づけの合間に吐息が漏れてしまう。

再び押し倒した彼は、丁寧に唇を舐めてから微笑んだ。

「今度はゆっくり、やさしくしますね」  
どうやら夜はまだ終わらないらしい。

遮光カーテンで覆っているから、ずっと夜でもいいかも、なんてばかげたことを考えながら、お願いします、と微笑み返した。

□でさせて？

今日の視察はサクッと終わった。  
おかげで午後はのんびりできたので、まだまだ元気がいっぱいだ。

夕食はあからさまでない程度に精のつくものにしてもらって、デザートはちよっぴり控えめに。とっておきの入浴剤を使い、念入りにお風呂に入ったから、お肌も割増ですべすべだ。

……いや、女王なんだから毎日使ってもいいらしいのだけれど、こういうのは気分の問題だ。

ともかく、準備万端にして、恋人のパジャマの上だけを拝借し、下にはひらひらの、そのまま寝たら寒くて無理だが、お誘いにはばっちりなナイトウェアを身につけている。

……ちよっと丈が微妙で、シャツの裾からフリルが見えているのだが、これはこれで男心を刺激するらしく、さつきからちよいちよい視線が留まっているので、多分正解なんだろう。

明日は予定のない日の曜日、それはもう準備万端、イエスノー枕なんていらなくらいだ。

勿論ヴァージルだってそのつもりなはずで、とろりと溶けた瞳は愛情と欲情が同じくらい見とれる。

湯上がりにお酒でもなんて言う前に、お姫様抱

っこでベッドにかっさらわれたことからしても、その気なのは間違いない。

嬉しそうに名前を呼んで、押し倒そうとしてくるのだが——待ったをかけるべく、自分から抱きついた。

恋人に甘い彼は、そうすると必ず抱きしめ返してくるのだ。

お風呂上がり心地いい体温にうっとりしかけるが、いかんいかんと気を引きしめて身体を離す。

「あの、ヴァージル、お願いがあるんです」  
「お願い、ですか？」

不思議そうに首をかしげつつも、ちゃんと言葉を待ってくれる。

すうっと息を吸って、思い切って言葉にした。  
「——ヴァージルの、舐めさせてください」

瞬間、正面の恋人の表情が真顔になった。  
金縛りにしても遭ったかのように硬直し、微動だにしない。

そして、痛いほどの沈黙が続いた。

今までしたいと口にしたことがなかったの、やはりはしたないと呆れられたらどうか。

気持ちいいと言っただけか、なにをしてもかわいいと喜んでくれるから、大丈夫だと思っただけだ。

でも、いつもいつもしてもらってばかりで——  
彼はなんの不満もないと断言しているけれど、で

も、自分からもしたいたいと思ったのだ。

なにより、そうした時の彼の顔が見たくなかった。やっぱりダメだったかと肩を落としかけたのだが、不意にヴァーゼルが身じろいだ。

「すみませんあなたの言葉だけで暴発しそうになつて我慢するのに時間がかかりました」

「え」

立て板に水のごとくなノンブレスは、彼が混乱している証拠だ。

言葉だけで暴発、とは。つまり、口でしたいと言っただけで、出そうになつたということ合っているのだろうか。

……本人に答えあわせを頼む度胸は出ないので様子を伺うと、赤面してぎゅつと拳をにぎりしめている。……事実のようだ。

「お願いですから、殺傷力の高い発言は予告してください」

どうか激情をおさめたらしく、ふーつと長い息をついたのち、真顔で頼んできた。

こちらにはなにが致命傷になるかわからないし、そもそも彼は普段から「俺をどうしたいんですか」と口走っている気がするのだが。

「そんなにダメでした？」

イメーτζじゃないとかだつただろうかと心配になるが、即座に首を全力で振られた。

「あなたが言うことで駄目なことなんて、ありま

せん」

いや、なくはないだろうとツツコミたいが、やこしくなりそうなので、やめておく。

「いえ俺が危ないという意味では駄目なんです、してもらえるのはとても……ああ想像だけで、ちよつと待つてください」

また考えただけで暴発しそうらしい。耐える姿はちよつと、いや、かなり滑稽だ。

とりあえず、過剰なほどに喜んではいられない。しかしこれでは、実際に口でするのは難しい気がする。

己の技術では、うまいこと脱がせてなんてことも不可能だし。

そもそも現時点で、雰囲気なんてのはできるわけがない。

どうしたものかと悩んでいると、やつと落ちついたらしいヴァーゼルが、今度は真剣な顔をして見つめてきた。

「無理を言っているわけではないですね？」  
気遣いのこもつた言葉の温度に、優しいなあと嬉しくなる。

「はい、私からしたいって思っただけです」

まあ、取り寄せた故郷の雑誌にその手の記事があつたとか、きっかけはあるけれど、あくまで決めたのは自分自身だ。

嫌だけど男性が喜ぶからとか、なにかに乗せら

れてとかでは断じてない。

アンジュがきつぱり言い切ったので、ヴァージルはほっと安堵の息を吐いた。

この調子ならいけるかな、と、シャツのボタンを二つくらい外してから、ずいっとヴァージルのしかかる。

斜めになっても、ちっとも苦しそうにならないあたりは、流石に鍛えているだけある。

そつと確認した下半身は、パジャマ越しでも反応しているのがよくわかって、彼の言葉が偽りではないことを裏づけている。

「……させてください」

ちよっぴり上目遣いで、吐息に乗せておねだりをすれば、断られるはずがない。

知っていて敢えてだから、ズルイのは自覚している。

予想どおり、ぐう、と唸ったヴァージルだったが、拒絶の様子はない。

「——どうぞ」

ベッドヘッドに背中を預けて、両手を広げてみせる。

そのまま下だけ脱がしていくのもいいのだが、折角なのでシャツのボタンも外させてもらった。

よく鍛えられた腹筋を見るのが、結構楽しいからだ。

ぺたりと頬をくつつけて、せわしない鼓動を聞

きながら、そつとポトムに手をかける。

協力的に腰を浮かせてくれたおかげで、苦労もなく脱がせられたのはいいのだが、しめつけがなくなつたと飛びだしたそれは、すでにしつかり勃つていた。

ちゅ、と胸にひとつキスを落としてから、悩んでいると躊躇いが生まれるからと、すぐに頭を落とす。

ふれてもいないのに先端からは雫が滲んでいて、本当に想像だけで大変らしい。

得意ではない自覚があるのでローションも用意していたのだが、これならなくても大丈夫そうだと、大袈裟なほどに跳ねた。

ちらりと仰ぎ見ると、真っ赤になりながらもこちらをまっすぐ——睨むように見つめている。

横に投げだされた拳には力が入っていて、傷にならないか少し心配だ。

期待と欲にまみれた顔を見ると、腹のあたりからなにかがこみあげてくる。

その勢いにまかせて頭を落とすし、先端に浮かんでいた雫を舐めとった。

独特の味はおいしいものではないけれど、恋人のものだと思えば大丈夫だ。

舐めても舐めてもどんどん溢れてくるし、緩い刺激では足りないだろう。

根元に指をかけてから、ゆっくりりと口を開けて、  
まずはくびれたあたりまでを含んでいく。

ぶるりと震えるのが直に伝わってきた。

異物を入れたことで唾液が出てきたので、それを潤滑剤代わりに、入るところまで入れていく。

「長すぎてすべては無理そうだ、喉まで使えればいいのだけれど、初回はハードルが高すぎる。」

「……無理は、しなくていいので……舐めて、くれませんか」

前進を震わせながらもやわらかい手つきで頭をなでてくる。

さっきの言葉が真実なら、限界に近いだろうに、こちらを案じてくれるのだから、胸が苦しくなるし、なにもしていないのに下半身が潤んでくる。

はじめは舐めてみたけれど、それではやはり刺激が足りない気がして、再び口に含んだ。

「んっ……ふ………」

なるべく唇をすぼめて、ゆっくりり上下に動かしていく。

コツもつかめてきて、徐々に滑らかにできるようになってきた。

卑猥な音がひっきりなしに響いて、口の中の苦みが強くなるが、離す気は起きなかった。

とはいえ初心者もいところだ、イかせられるかは不安でもある。

カリのあたりまでもどつてきたところ、様子

を窺うべく視線を上げると、視線が合った。

「……っ！」

ぐつと腹筋に力が入ったのがわかった。

「指は、こう、して……舌は、先を、吸ってくれませんか、か」

甘えた声で懇願され、緩く指示されれば、答えはひとつしかない。

どうやら見つめているほうがいらしいと察したので、なるべく上を見ながら、言われたとおり手で根元を刺激しながら、飴を舐める感じで先端を刺激したり吸いついたりしていた。

不意にヴァージルの右手が己の両手に重ねられて、激しく動かされた。

自慰の手伝いをしているような光景に、くらりと目眩がする。

口を離すまいと必死になってしゃぶりついていると、ほどなく限界がきたらしい。

押し殺した、聞き慣れない音とともに、びゅくりと口内に精が放たれた。

慌てて離そうと動かれたが、いやいやと首をふり、よこせとばかりに口内へ迎え入れてやる。

びくびくと長い射精が終わり、圧迫感がなくなつたところで口を離れた。

最後にちゅうっと吸いあげたが、流石に飲むことはできそうにないな、と困ってしまう。

そこへ、すつとティッシュがさしだされた。

ありがたく使わせてもらうと、その次には水が手渡される。

「ごくごく飲むと、喉へと苦みが落ちていった。

「ちよつと飲むのは無理がありました」

「俺もそこまでは望みませんし、出さずに抜こうと思っただけです……」

「我慢できませんでした、としよげる男がかわいくて、ぼんぼんと頭をなで……ようとしたが手がべたついているのであきらめた。

「して見たかったので悔いはないが、キスはしばらくらいし手も使いづらいし、なかなか厄介なものだ。

「ヴァージルは気にしないかもしれないが、こちらがそうもいかない。」

「……ね、ヴァージル、一緒にシャワーを浴びませんか」

「もう一度気合の入った夜着の上にシャツを羽織るのは少々間抜けだが、気にせず抱きしめたりあれこれするなら、それが一番だろう。」

「照れはあるが、この状況で別々に、なんて寂しいので却下だ。」

「舐めたかったのは本当ですけど、ヴァージルに愛されるのも、勿論好きなので」

「……ええ、俺もあなたを愛したいです」

「そうと決まればと、脱いだボトムだけを穿いた彼は、シャツの前を開けたままアンジュを抱きあげる。」

「まだこの下をきちんとして見えていませんしね」  
「やっぱり見たいらしい。見せたいから着たのだし、そう思ってもらえるのは嬉しいけれど。」  
「今夜は長くなりそうだなあと、ちよつとわくわくしながら、たくましい腕に体重を預けた。」

各話へのコメント（読み終わってからを推奨します）

[おはよう&おやすみ]

CPの朝から晩までなら、こういうワンカットがほしいなと思って。  
おはようすでに思いっきり失敗しているのですが、  
名前のお話が入っている都合上、恋人同士の時のヴァーゼルが  
「アンジュ」と呼ぶ描写をできるだけ減らしています。  
あとから読み返すと杏って呼んでいるんだよ、  
と思えるようにするためです。  
先に漢字を書くとネタバラシもいいところなので、  
会話文では誤魔化している次第です。

[膝枕]

ラベンダーで眠くなるのはガチらしいです。  
よく呟いていますが、寝首を搔ける状況を許す、  
というのが性癖なので、いつも書きます。  
されたこともしたこともなさそうだよなーと思ったので、  
こういう話になりました。

[スイッチ]

女王と個は区切らないとしんどいと思うのです。  
アンミナにかぎらず、切りかえる話を書くことが多いので、  
好き……なのかもしれません。

[無理はいけません]

ジルアンのアンジュはわりと無理をしそうだよなあ。  
そしてヴァーゼルはそれを絶対許さない気がします。  
だから甘えている感じが出せていればいいのですが、  
そこは微妙な気がします。

[彼の癒やされる方法]

ヴァーゼルってそういうところあるよね、という。  
されたい、よりしたい派な気がします。  
尽くしたい男……

[耳をつけたい]

某夢の国やらなにやらで流行っているアレです。  
当方がものすごく疲れていた時に、つけたい！  
と発作を起こしたものです。  
きっとヴァージルは記念撮影もノリノリでやってくれる。

[ポニーテールは危険です]

ヴァージルって一体何個アンジュに対して危険があるんだろう。  
髪型でもいちころだよ、と思って書いたはず。  
ツインテールでも悶絶することですよ。

[ドッジボール大会を開催したい]

ビズログネタ。ツッコミどころ満載だったので、つい。  
でも実際、結構格好よくて見惚れそうですよね。

[水着攻防戦]

烏合の衆って言い回しが我ながらうまくはまったなと思いました。  
ヴァージルってそういうところ（略）

[童謡の午後]

一番はじめに書いたものです。  
ゲーム内会話から、部屋デートで読み聞かせがあると思ったのに、  
なぜかコントしてましたね。  
いや、あれはあれで面白かったのですけれど。

[キスの日]

ネタにしようと思ったけど調べたら日付が違ったので、これだ！ と。  
五カ国分くらい調べてそうだなと思います。

[キス禁止]

エナジードリンクだストレスだだと、口内炎もできそうだよなど。

[ヴァージルの誕生日]

ヴァージルってそういう（略）  
我ながら納得のいく誕生日話になりました。  
でも、甘やかしまくる誕生日も書いてみたいですけど。

[アンジュの誕生日]

前後一週間お祭りしてそうですが、それを書くとギャグになる……  
ということで、無難？ にまとまりました。

[何度でも、呼ぶから]

レイナとタイラーの名前からして、  
アンジュも漢字だよなあというところから端を発しました。  
実は「杏樹」のほうが個人的にはしっくりくるのですが、  
樹の字がややこしく、一文字にしたほうがヴァージルも覚えやすい、  
ということで杏だけにしています。  
恋人が呼べばイントネーションが違ってもいいとは思いますが、  
よすがはほしいのではないかなと。

[迷惑な隣人]

続きを読みたいと仰ってもらえたので書きあげられました。  
きっかけは TL で守られるヴァージルとはどんなものか、  
みたいなのがあったからです。  
個人的に、ジルアンの場合、アンジュは前に出ているイメージです。

[今の自分が、一番]

ヴァージルの恋人について考えていたのですが、ちょっとズレました。  
そもそもは、聖地内で起こせる事件というのはなかなか難しいなあ、  
と考えていてできたものです。  
書いているうちに、ゲーム内恋人と同一人物っぽさはなくなりました。  
性別が不明なのはゲーム描写に準拠した名残です。

[誕生日 R18]

オープンランジェリーってイイですよっていう。  
ヴァージルは脱がすところから楽しみそうだし、  
やむなく汚すのはしかたないけど、なるべくよけたがるよな、  
と思ってああいう感じになりました。

[口でさせて?]

行為自体の好き嫌いではなく、  
これも寝首を搔ける状況なので、許される関係が好きです。  
ヴァージルは想像だけでヤバくなりそう、と閃いてしまったら、  
もうこれを書くしかないと思ったのです。

[表紙の話]

プリントオン様にデザインをお願いしました。  
仕様書に書いたのは、

カラー：ピンク、オレンジ（赤や黄色に見えないように）  
雰囲気：人工物よりは自然物メインで。話の中で杏の樹が出る  
恋愛ものだがシリアスなので甘ったるいものは不可  
キーアイテム：銃だけど上記と相性が悪いので省いて可

こんな感じをお願いした結果の表紙です。  
散っている花を杏にしてくれるし、  
銃もさりげなくシルエットで入れてくれるし、  
背表紙オレンジで俺との本です！  
って主張が凄くヴァージルっぽいなあと。  
ばっちりな表紙をつくってもらえて、感謝しかないです。